

キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テコ盛り。

つひまぶ

つひまぶのひとまちぶんか

うめ地下 号

3 2016 月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.7 2016年3月31日発行(毎年3・7・11月発行予定) 編集・発行:つひまぶ実行委員会/大阪市北区役所+北区のおもろ通信団(浅香保ルイス龍太・棚橋真理・藤堂千代子・松岡慧祐・山田寿也・依藤智子)+大阪市職員ボランティア + 協力:奈良県立大学地域創造学部 連絡先:大阪市北区役所(大阪市北区扇町 2-1-27) 【tel】06-6313-9743 【fax】06-6362-3821 【mail】tsuhimabu@gmail.com 【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp (誌面に載せられない情報はブログでね♡) 定価:0円 主な配布場所:大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンターほか多数(配布場所はブログにて随時お知らせします) ※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。

うめ地下へようこそ

Book review

うめ地下をもっと知るための本

「大阪ラビリンス」編：有栖川 有栖 (新潮文庫)



ジャンルを超えた10人の作家による、大阪を描いた作品が収録されたアンソロジー。有栖川有栖が、愛情たっぷりにセレクトしている。なかでも、堀晃のSF作品「梅田地下オデッセイ」は梅田の地下街を舞台にした、まさにうめ地下な作品。長らく絶版になっていたが、このアンソロジーに収録されて、気軽に読めるようになった。梅田の広大な地下街が何者かによって閉鎖空間になってしまったら…という物語。その場に閉じ込められた

主人公を含む人々が、生存のための闘いをはじめ。閉鎖は数ヶ月に及んだため、奪い合いの闘争から自主的な自治まで、さまざまなことが起こり、まさにリアル陣取りゲームが展開される。百貨店に食料拠点を持つ北部の阪急グループ、西部の阪神グループ、そして食料拠点がなくても警察所有の武器を手で略奪を繰り返す東部の曽根崎グループなど、シャッター・防火扉が閉まり迷路と化した地下街で生き残りをかけて繰り広げられる抗争は、迷宮をさらに

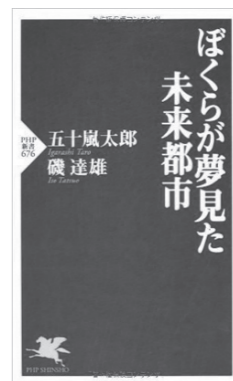
カオス化させる。1978年当時の梅田の地下街が舞台なので、まだ、ディアモールもイーマも堂島アバンザもヒルトンプラザもない。それでも、すでに梅田はダンジョン化していて、それを詳細に描く作家の筆致は偏執狂的だ。読み進めるほどに頭が混乱してくること必至の一冊となっている。作家自身の手による当時の地下街マップ付きなので、貴重な資料であるとともに、梅田の地下を知らない人でも楽しめる作品。(ルイス)

「大阪地下街本」(ぴあ MOOK 関西)



ありそうでなさそうな、大阪地下街のガイド本。うめ地下(ホワイティうめだ・ドージマ地下センター)のみならず、なんばウォーク、NAMBА なんなん、あべちか、京橋コムズガーデンも。大阪出身の作家・柴崎友香による巻頭エッセイほか、ケンドーコバヤシによる地下街グルメ紹介、NMB48 が巡る地下街ショッピング、B級ネタを得意とする放送作家・吉村智樹の地下街探訪など、さまざまな視点で大阪の地下街を紹介した本。各地下街担当者へのインタビューや、半世紀前のオープン当時の写真、歴代のパーゲン告知ポスター画像なども収録された、充実の一冊。(ルイス)

「ぼくらが夢見た未来都市」五十嵐 太郎・磯 達雄 (PHP新書)



上空へ地下へ、縦方向にレイヤーを重ねる梅田は、高度成長期に少年向け雑誌で描かれた未来予想図の具現化なのかもしれない。本書では、近代社会がどのような未来都市を夢見てきたかが、豊富な事例とともに紹介されている。大阪、愛知、上海の3つの万博を狂言まわしとし、建築家のみならず、アーサー・C・クラークから池上永一まで、手塚治虫から大友克洋まで、「猿の惑星」から「20世紀少年」まで、岡本太郎からヤノベケンジまで、サイバースペースからナノ・テクノロジーまで、サブカルチャーにも目配せしながら、近現代史を生きる人々が、どのような未来都市を夢想してきたかが網羅的に紹介されている。(ルイス)

「偽装するニッポン」中川 理 (彰国社)



駅や電話ボックス、交番といった地域の公共施設にも、ディズニーランドのような「テーマ」の方法によって、メルヘンで「かわいい」デザインが与えられるようになっていくことを、本書では「ディズニーランドゼイション」と呼んでおり、その現象の意味が全国各地の具体例をもとに考察されている。うめ地下にも、泉の広場(ホワイティうめだ)、天使の天井絵(ドージマ地下センター)など、一見、その場所との必然的な結びつきがなさそうな空間演出が見られる。それは、地下街という無機質な移動空間のなかで、その無機質さや退屈さを消し去るために仮構されたイメージなのではないだろうか。本書を一読したうえで、うめ地下を歩いてみると、これまで見過ごしていた「地下街のディズニーランドゼイション」に気付くことができるかもしれない。(松岡慧祐)

「モール化する都市と社会」若林幹夫 (NTT出版)



ショッピングモールの歴史と諸相を社会学的な視点から解き明かし、〈モールのなもの〉が商業施設を超えて都市や社会全体にひびきつつある状況を論じる本書は、地下街の成り立ちを考えるうえで大きな示唆を与えてくれる。戦後に発達した地下街は、鉄道ターミナルの連絡通路であるだけでなく、各種商業施設を結ぶ通路にもなり、また、それ自体も専門店の建ち並ぶ商業施設になることで、ターミナルを基盤とする巨大な消費空間の一部として成立した。当時、このような消費空間は「ショッピングセンター」とも呼ばれ、現在の「ショッピングモール」のさきがけとなった。実際、ホワイティうめだやディアモール大阪は、今も「ショッピングセンター」として統計にカウントされている。うめ地下にも見いだされる〈モールのなもの〉とは、一体どのようなものなのか? そんな思考を巡らすきっかけとなる刺激的な論考である。(松岡慧祐)

編集後記

地下街は、車が通らないし、信号もない。明るくて安全だし、夏も冬も快適で雨が降らない。だから梅田周辺を歩くときには、ついつい地下に潜ってしまいます。それもあってか、梅田は地上のビルよりも地下街の印象が強い。とはいっても、「地下街って何があるの?」とあらためて聞かれると、特にこれといったものが思い浮かびません。でも冷静に考えると、地下は地上と違ってさまざまな制約があるので、地下に「まち」をつくるのは大変なことなんですよ。それを感じさせないこと自体が、じつは「何があるの?」に当てはまるのではないかと思います。今回の取材を通じて、地下街にはさまざまな工夫があることを知ることができました。そして、知ることによって地下街の見方が変わってきました。ほんの一部しか紹介できませんでしたが、つひまぶを通じて、みなさんの地下街の見方が変わればうれしいです。そして、地下街も北区の魅力のひとつとして感じていただければと思います。(Ta-yang)



「つひまぶ」ブログ
毎週月・木更新
http://tsuhimabu.blogspot.jp

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebookにてご連絡いただくか、大阪市北区役所地域課区民協働担当 (tel. 06-6313-9743) までご連絡ください。



■(株)紅屋代表取締役 木邨善仁さん
http://beniya-osaka.co.jp/

地下街では、今ほしいものが売れます。

今でこそ海外ブランドの旗艦店が立ち並んでいるキタにあって、はるか昔に、海外ブランドをいち早く大阪に持ち込んだ(株)紅屋。梅田の地下街にあっては、1963年(昭和38年)、ウメダ地下センターのオープン時からお店を構える、スターターのお店でもあります。同センターのオープンに尽力されたのも、その運営に深く関わってきたのも、紅屋。特に、初代社長である田中鍔三さんは、店子でつくる商店会長でありながら、管理側の大坂地下街(株)の経営陣にも名を連ねるといって、八面六臂の活躍をされた方でした。今回、初代社長の孫にあたる三代目の現社長、木邨善仁さんにお話を聞きしました。紅屋といえば、かつては「プチ・シャンゼリゼ」にあって、イブ・サンローランなどの舶来品の婦人衣料や用品を主に扱っていました。舶来商品の価格は今とあまり変わらないか、むしろ今よりも高かった時代です。まだ海外ブランドの名前がそれほど知られていない時代でもありました。そんな時代に、舶来ものを中心に販売するのは、大変な決断だったと思

います。東京よりも大阪のほうが火がつくのは早かったというので、その優れた先見の明は歴史が証明しています。

私の思い出のなかの紅屋は、白地に千鳥格子の紙袋がかったよくて、流行の先端の洋服を買いに行くときは、百貨店ではなく紅屋さん、という時代でした。ちよっとお高いけど奮発して、勢いで買ったことも(笑)

しかし、時代とともに地下街も変化していきました。気が付けば今、うめ地下に「紅屋」の看板は見当たりません。時代は変わり、紅屋の店名も扱う商品も変わっていききました。

でも、大阪商人の精神は、三代目社長にも脈々と受け継がれている様子です。「ええもんを売らんとお客さんは逃げます。人の口伝えは強力で、インターネットの時代になっても、対面販売でお客さんに伝えることが一番大切です。そのためは、スタッフが商品をよく理解して、売れ筋を察知して、お客さんのニーズを把握して対応することが大切です」と、木邨さんは言います。

うめ地下では、お客さんの満足度を高めるために、販売員のロールプレイング・コンテストが開催されています。これもまた、お客さんとのやりとりのなかから、ニーズを把握し、的確な提案をするための研鑽です。

対面販売やロールプレイング・コンテストに力を入れるのも、結局のところ、同社の掲げる「お客様第一主義」の実践です。

興味深かったのは、地下街ならではの商売。「百貨店は、お客さんが時間をかけて考えてから買うところ。でも地下街は、今、必要なものが売れますね。季節を先取りした商品よりも、今、というのが特徴です。そのために、今なにか必要なかを的確に把握して販売することが大切です。なるほど。

「梅田はええまちです。私たち紅屋は、お客さんや地域に支えられてきて、今があります。感謝の気持ちを持って、これからの大阪、いえ梅田、うめ地下をより一層にぎわいのあるまちにしたいですね。そう語る木邨さんは、ここ数年、露天神社の節分祭で、赤鬼に扮してまちを練り歩いている、大阪LOVE!うめ地下LOVE!の人です。

(三)ミリちゃん

3者3様 うめ地下な人々



店舗です。オープンした当時には、「喫茶店戦争勃発か？」なんて新聞記事が出るほど、世間には奇異に映った出店でした。ただ、乱立するコンビニと違って、両店は、お店のコンセプトが明確に違います。英國屋倶楽部が高級志向で、コーヒーのおかわりもでき、ゆっくりと過ごすことができるなら、英國屋NORTHは、券売機で食券を買うセルフスタイルのリーズナブル志向で、手短かにコーヒーを楽しむことができるお店。値段も違います。つまり、ターゲット層が違うわけです。

また、英國屋NORTHは、梅田駅から泉の広場方面に向かって左側にあります。この配置が絶妙なのです。朝はたくさん通勤する人が梅田駅から泉の広場方面に流れていきます。ハワイティウメダは左側通行なので、左側にある英國屋NORTHには、自然と、そういう人がお店に入りやすいわけです。手短かにコーヒーを飲みたい通勤者のニーズを、がっちり掴んでいます。

よう考えてあります。

「お客さま本位の店づくり」の見本が、うめ地下にはあります。

(Taiyang)

■英國屋倶楽部・英國屋NORTH
http://www.cafe-eikokuya.jp/

地下街の店内に下りの階段？ すぐ近くにもう一店舗？

御堂筋線梅田駅の南改札前から泉の広場に延びるハワイティウメダ(イーストモール扇町)にある、エレガントな雰囲気のカフェ「英國屋倶楽部」。店内に入ると、正面は上りの階段、右には下りの階段。ん？ 地下街なのに店内に下りの階段？

そう、英國屋倶楽部は、地下街にあるお店なのに、店内にはさらに地下のフロアがあるという、ちょっと不思議な構造をしています。辺りを見まわしてもこんな構造になっているお店はありません。なぜなのでしょう？

よくよくお話を聞いてみると、じつは、イーストモール扇町の地下には構造上の空間があって、場所によっては、英國屋倶楽部のように、店内にさらに地下のフロアをつくるのができ、ウメダ地下センターがオープンした当初には、そのようなお店がいくつもあったそうです。ただ、そのような構造は使い勝手がいいものではなく、お店の入れ替えや改装のたびにフロアはフラットにされ、上下のフロア構造を残しているのは、今では英國屋だけになってしまいました。地下のフロアは禁煙席、上のフロアは喫煙席。地下のフロアは通路から見えないので、隠れ家的に利用される人が多いのだとか。構造をうまく利用しています。

さて、英國屋といえば、チェーン店ではありえないような、高級な家具とウエッジウッドのカップ。高級志向の同店のファンはたくさんいます。同店のHPには「お客さま本位の店づくり」とあります。ありふれたコンセプトのようですが、よくよく見ると、このコンセプトが実現されている具体的な例が、ここにはあるのです。

じつは、イーストモール扇町には、英國屋倶楽部の東向かい北側すぐのところ、英國屋NORTHがあります。こちらも上下2フロア構造のお店。距離にして10メートルも離れていない場所に、もう一

地下街と同じ年・地下街が通学路だった 飯井克典さん



地下街は子どもの楽園、通学路兼遊び場

飯井克典さんは、ウメダ地下センターができた1963年(昭和38年)生まれ。ということは、うめ地下と同じ年齢、同じ時代を生きてきたということ。生まれも育ちも中之島だけれども、そんな飯井さんには、梅田の地下街の思い出がたっぷりあると言います。さてさて、いったいどんなお話が飛び出すのでしょうか？ 興味津々で、お話を聞いてきました。

「自宅は、現在の中の島センタービル前の公園があるところで、中之島のほぼ西端。そこから、堂島小学校と菅南中学校(当時の場所は北野病院西側)へ通学していました。通学路は交通量も多くてね、子どもの足ではかなりの時間を要します。大阪駅からビジネスマンがバスに乗って中之島へ通勤してくるんですが、僕は、ビジネスマンが降りて空になったバスに乗って、逆方向、つまり大阪駅へ向かうんです。そこから学校までは、地下街を通学路代わりに。雨の日も傘要らずなんで、みんなからうらやましが

られる通学でしたよ。」

ランドセルを背負った小学生が、スーツ姿のビジネスマンに混じって地下街を通学する姿って、なんだか変な感じがします(笑)

通学路や遊び場を聞いてみると、ドーチカ、ウメダ地下センター、大阪駅、阪急百貨店、阪神百貨店、サントリー、渡辺橋、朝日新聞ビル、北新地、駅前ビルなど、およそ小学生には関係ない場所が次々に出てきます。「かくれんぼでブティックの試着室に隠れたり、鬼ごっこで地下街を走りまわったり、おやつ調達は百貨店の試食、のどが渴けば喫茶店でお水をもらう」。近くに公園がない彼らシテイボーイにとって、それらの場所は、日常生活のなかにある普通の遊び場だったようです。親にとっては、車が行き来する地上よりも、地下街のほうが顔見知りのお店も多く、安心で安全な場所です。おまけに、「夏は涼しくて冬は暖かい。雨でも関係なく思う存分遊ぶ場所でした。」

また、地下街は、好奇心旺盛な子どもにとって、いろいろなお宝探し体験ができる場所でもありました。どこまで続くのこの地下は？ なんて、迷路のようになっている通路を走りまわっていたので、今でもまったく迷うことなく自由自在に歩きまわることができ、地下街マイスターです(笑)

今では絶対考えられないことですが、地下街を自転車で走っていたことも。人にぶつからないようにスライスイ歩いているので、いつの間にか人をよけて歩くのが身に付くんですよ」と語る顔は、まるでやんちゃ坊主、おちゃめな子孫のような笑顔です。

平日昼間の人口密度が多い場所も、休日はガラガラ。そのときはばかりは、普段できないラジコン遊びやローラースケートができるサーキット場に早変わりします。彼らにとって梅田は日常生活の場所、地下街はTシャツにサンダル履きの普段着で行く、通学路兼遊び場なのでした。

昔のやんちゃなシテイボーイは、今では和服姿でオシャレに決め、ひげをはやしちよい悪オヤジになりました。そして、梅田、とりわけ地下街とともに育った彼らにとっては、今も違う意味での永遠の遊び場です。(三)ミリちゃん

梅田地下街の歴史

日本最大級の地下迷宮だとか遭難必至の超難度ダンジョンだとかが挙げられるのだけれども、この年表を見ると、そのことが一目

いわれている梅田の地下街。その理由のひとつには、増改築が繰り返されたことによって、きわめて複雑な構造になっていったことが瞭然とわかります。ウメダ地下センターのオープンにはじまる、梅田地下街の増殖とリニューアルの歴史をご覧ください！

1985 1984 1983 1982 1981 1979 1977 1976 1974 1973 1971 1970 1969 1968 1967 1966 1964 1963 1962 1961 1958 1956 1955 1930

1930 大阪市高速鉄道部が大阪駅前地下鉄停車場を中心として通ずる地下通路の両側に地下商店街をつくる構想を持っていることが、新聞報道される。

1955 第1回大阪地下街(株)設立準備委員会開催

1956 大阪地下街(株)設立

1958 梅田地下街建設の準備作業開始

1961 梅田地下街入店者募集

1962 梅田地下街起工式

1963 梅田アーケード立ち退き完了、地下街に編入

1964 ウメダ地下センター振興会結成

1965 梅田地下街1期(ウメダ地下センター)開業

1966 ウメダ地下センター給排気塔工事完工

1967 堂島地下街(株)設立

1968 堂島地下街(ドージマ地下センター)起工式

1969 ドージマ地下センター名店会結成

1970 堂島地下街(ドージマ地下センター)開業

1971 ウメダ地下センター地上給排気塔回り噴水完工通水式

1972 ウメダ地下センター「味のコーナー」店舗再編成

1973 ウメダ地下センター「銘品コーナー」再編成

1974 梅田地下街第2期起工式

1975 東梅田駅拡張のため、ウメダ地下センター特売場・オートコーナー撤去

1976 梅田地下街防犯連絡会結成

1977 梅田第2期入店者募集広告各紙へ掲出

1978 梅田地下街防犯連絡会結成

1979 ウメダ地下センター道標(方向指示板)を万国博に備え、ローマ字入りに取り替え

1980 ウメダ地下センター振興会、ミス・ウメチカ「泉の精」を募集

1981 ウメダ地下センター2期(泉の広場)開業

1982 「泉の広場」に投げ込まれた硬貨24万5,034円を市立身体障がい者福祉センターへ寄付

1983 地下街における煙の流動観測を本格的に実施する

1984 社内報「ちかがい」創刊

1985 ウメダ地下センターメインコーナー竣工

1986 ウメダ地下センター「花の広場」竣工

1987 コマ通り北端店舗再編成

1988 阪急ファイブと連絡

1989 梅田延伸地下街(ブチ・シャンゼリゼ)起工式

1990 ウメダ地下センターと曾根崎警察署新庁舎が地下で連絡

1991 ウメダ地下センター「おしゃれ南コーナー」一部改装

1992 大阪地下センター商店会連合会がイタリア・ミラノのサロット・ディ・ミラノ商店街と姉妹提携調印

1993 「ブチ・シャンゼリゼ」開業

1994 創立20周年記念「大阪地下街まつり」実施

1995 ウメダ地下センター直営店「ウメダ・たこ焼コーナー」開業

1996 ウメダ地下センター・コマ・OS通り天井改造工事完成

1997 ウメダ地下センター「泉の広場」改装

1998 大阪5地下街、サロット・ディ・ミラノ提携ジョイントカーニバル開催

1999 「ウメチカ」一番街南コーナー」改装オープン

2000 ブチ・シャンゼリゼ改装工事、「ブチシャン」と改称

2001 5地下街共通S.Cカード「Vカード」発行

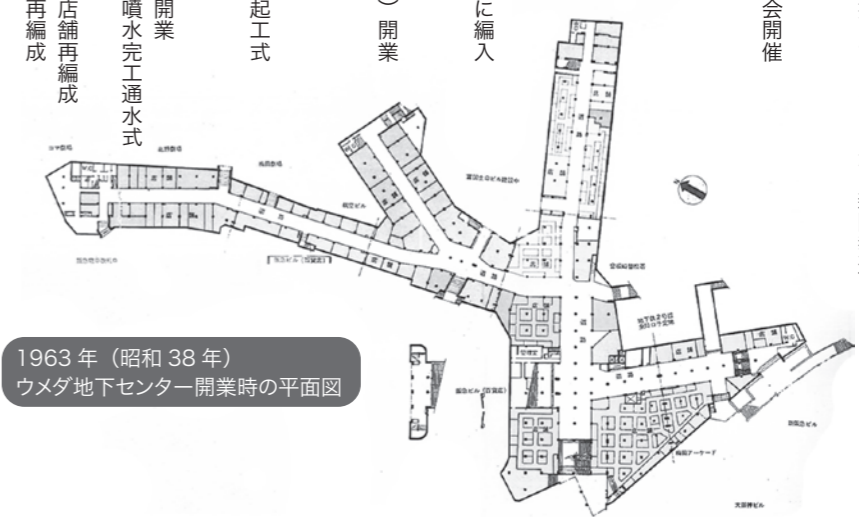
2002 ウメダ地下センター1期改装計画実施案成る

2003 阪急三番街、改装により映画館「阪急プラザ劇場」が閉館

2004 ウメダ地下センター1期改装準備工事着工

2005 大阪5地下街、ハレー彗星接近フェア実施

1963年(昭和38年)ウメダ地下センター開業時のパンフから



1963年(昭和38年)ウメダ地下センター開業時の平面図

2014 2012 2010 2008 2006 2005 2004 2003 2002 2001 2000 1999 1998 1997 1996 1995 1993 1990 1989 1987 1986

1986 ウメダ地下センター1期扇形通り改装工事着工

1987 ウメダ地下センター2期改装工事着工

1988 「ホワイティうめだ」グランドオープン

1989 「ファッションアベニュー」閉鎖、「ファンシーロビー」復旧

1990 「ブチシャン」全面改装工事着手

1991 阪急三番街改装

1992 新OSビル完成、ホワイティうめだと連絡通路でつながる

1993 4地下街通路・広場が全面禁煙

1994 大阪駅前交差点・ホワイティうめだ給排気塔周辺整備完成

1995 ディアモール大阪オープン

1996 ホワイティうめだをはじめ、梅田ターミナル地域の案内システムを統一

1997 ホワイティうめだ内の府警広報センターがコミュニティープラザとして改装オープン

1998 4ヶ国語「大阪地下街マップ」発行

1999 ホワイティうめだ2期分の冷却塔を曾根崎東交差点北側に移設、稼働

2000 「サニータラス」トイレ、階段移設

2001 「ファンシーロビー」入口、通路拡幅

2002 「ファンシーロビー」「ファッションロビー」入口改装

2003 ホワイティうめだ・阪急HEPファイブが接続

2004 「ファッションロビー」に隣接するトイレ新装

2005 ホワイティうめだ1期地下置クーリングタワーの改修

2006 ホワイティうめだ1期通路冷房化工事着工

2007 「グルメテリア」オープン

2008 「夢ステーションうめだ中央店」拡張、案内業務スタート

2009 ホワイティうめだ1期2期取り合い部分トイレ改修

2010 ホワイティうめだ社員休憩室完成

2011 「サニータラス2」トイレ拡張改装工事完了

2012 ホワイティうめだ、冷房増強工事完了

2013 ホワイティうめだ、携帯電話利用可能に

2014 ホワイティうめだ、案内所改装オープン

2015 ホワイティうめだ、1期地下鉄御堂筋線地下道接続部分改修・サイン設置工事竣工

2016 「ブチシャン」北広場改修工事竣工

2017 「ポケットセブン」「お菓子DOME」改装工事着工

2018 「ポケットセブン」を改装し「ポケットパーク」として竣工

2019 「泉の広場」改装オープン

2020 「泉の広場」、車イス対応及び荷捌き用エレベーターの新設竣工

2021 「夢ステーション泉の広場店」オープン

2022 「サニータラス2」に身障者対応トイレ新設

2023 ホワイティうめだで第1回接客ロールプレイングコンテスト開催

2024 第10回SCロールプレイング全国大会でホワイティうめだ・赤垣屋の大島哲さんが準優勝

2025 地下街テロ対処総合警備訓練実施

2026 「FARURU」リニューアルオープン

2027 「ブチシャン」トイレ女子専用化

2028 ホワイティうめだ、大阪富国生命ビル建替に伴う新接続竣工

2029 ホワイティうめだ、阪急百貨店建替に伴う新接続グランドオープン

2030 「mikka」リニューアルオープン

2031 大阪市交通局の駅ナカ施設「ekimo」オープン

資料提供：大阪地下街株式会社

うめ地下トリビュタ72連発!!!

【001】泉の広場は、ミラノと大阪市が姉妹都市だからできた。

【002】ノースモール2とイーストモール新御堂を結ぶ幻の通路がかつて設計されていた。その幻の通路には現在、NTTの回線が敷かれている。

【003】イーストモール扇町のスロープ（高低差）は、もともと低かった天井高をアップさせるために床を低くする工事の結果として生まれたもの。

【004】御堂筋線梅田駅改札前の広場とホワイトいうめだの間には高低差があり、スロープで埋められている。

【005】ホワイトいうめだでは、高低差を埋めるために、階段ではなくスロープが最初から採用されている。最初からユニバーサル仕様。

【006】ノースモール1はサラリーマン向けの立ち飲み屋などカジュアルな店が中心、ノースモール2は女性向けのワインバーやバルなどおしゃれな店が中心という、すみ分けがある。

【007】イーストモール新御堂とイーストモール扇町は、飲食メイン、パチシャンは洋服・生活雑貨メイン。

【008】ファルルはファッションロビーと呼ばれていた時代と比べると、一部にはメンズもあるが、主に若い女性をターゲットにしている。一方、その後にはできた mikke は 20〜30 代の働く女性をターゲットにしている、すみ分けができています。

【009】ホワイトいうめだでは全域で無料の wi-fi が使える。

【024】オオサカガーデンシティの噴水の水は、今は出ていない。

【025】オオサカガーデンシティは旧国鉄梅田南ヤード再開発事業でできた。

【026】オオサカガーデンシティは全面が坂道になっている。一番低いところは、地上でいうとリッツカールトンと西梅田公園の間の十字路に当たる。

【027】フィオレは梅田DTタワーの地下にあるのに、ダイヤモンドの一部として扱われている。

【028】ダイヤモンドのオープン当初は楽器の形をした壁があり、音階のボタンを押すと音が鳴るものがあったが、後に撤去された。

【029】ダイヤモンドの円形広場の中心は反響が大きいので大笑い注意!

【030】ダイヤモンドには、アンモナイトの化石が埋まっている壁面がある。

【031】ダイヤモンドは「ダイヤモンド地区のモール」という意味。この地域の形が五角形なので、そう呼ばれている。

【032】ダイヤモンドの円形広場西側には赤ちゃんルームがあり、オムツ交換室と授乳室がある。

【033】ダイヤモンドの突き当たりにはある交番は「ダイヤモンド地下街交番」。ダイヤモンド地下街と呼ばれていた頃の名残。

【034】阪神電車西改札口の西側通路は閉鎖され、今は迂回路ができています。

【035】北新地駅東口の東側は、店舗はないけど地下街。

【010】泉の広場はアメニティという先進的な概念を地下街に取り入れたもの。地下街のオアシスとして、かつてはベンチも設置されていた。

【011】ホワイトいうめだには大阪府警のコミュニティプラザがあり、そのなかには、なぜかミニパトが展示されている。どうやって入れたのだろうか?

【012】ピカデリー梅田は泉の広場と接しているのに、地下から行くことができない。非常にもったいないことだと思う。

【013】ホワイトいうめだのその下の地下2階には従業員用の休憩室があり、従業員専用の割引チケットなども置いてある。

【014】ホワイトいうめだは、地下鉄の終電に合わせて、出入口が閉鎖される。駅から遠い、泉の広場から順番に開められる。

【015】1961年(昭和36年)頃、うめ地下建設時に、地下を掘っていたとき、旧曽根崎警察署が傾くという事故があった。ただし、建て替えが決まっていたため、問題にはならなかった。

【016】ホワイトいうめだの「ホワイト」は「white」と「city」をつけた造語。

【017】ウメダ地下センターがオープンした1963年(昭和38年)11月29日には、約100万人の人が訪れた。

【018】3方向が「阪急梅田駅」と示している案内サインがある。

【019】ホワイトいうめだには、消防署(大阪市北消防署分駐所)がある。

【020】ホワイトいうめだにはウメダ地下センターのオープン時から営業している店舗が10店舗以上ある。半世紀以上!

【021】ホワイトいうめだに改称しているのに、「ウメ地下」と呼ぶ人が多い。

【022】ホワイトいうめだ1期工事は新御堂筋の建設と同時に起こされた。新御堂筋の柱がそのままホワイトいうめだの躯体になっている。

【023】パチシャン通りのパチシャンはパチ・シャンゼリゼの略。

【036】ドーチカの天井には天使の絵が描かれている。

【037】しかも、この天使の絵は、プリントではなく、直接描かれている。

【038】そのため、経年劣化でヒビが入ったりするので、ときどき補修している。

【039】ただし、7月のドーチカ50周年を機に美装化がおこなわれ、サインが一新されるので、見るなら今のうち。

【040】ドーチカの一番南側のドーム状になっている天使の絵は、7月以降も残される。

【041】ドーチカのトイレの壁面にも、天使の絵が描かれている。

【042】ドーチカの一番南側には堂島の古地図が年代別に展示されている。

【043】ドーチカはビジネスマンの利用が多いので、平日がにぎわっている。定休日は第3日曜。

【044】ドーチカのキャラクター「堂島ちか」は、米俵型のヘアスタイル。堂島にあった米会所が由来となっていて、商売繁盛の神様を祀る神社の福娘だから。

【045】ドーチカ開業当時には、奥村千ヨが歌う『大阪の街「堂島」』がソノシートで発売された。

- 地下
- 地下通路
- 駅
- 建物
- 出入口

【046】じつは、梅田の地下街すべてを網羅した地図は、公式には発行されていない。

【047】梅田でお腹が空いたらとりあえず地下に下りる。これは一般常識!

【048】うめ地下は、このまま開発が進めば、100年後にはエヴァンゲリオンレベルのジオフロントになると言われている。

【049】御堂筋線梅田駅の南改札と中央改札は ekimo でつながっているのに、中央改札と北改札はつながっていないので、行けない。すごく不便!

【050】北新地駅みどりの窓口前にはキタザウルスちゃんを待ち合わせ場所として設置された。



【051】現時点でもっとも新しい梅田の地下街は、「ekimo」の大阪市交通局が運営する駅ナカ商業施設。

【052】阪急三番街の名前の由来は、開業当時の住所「大阪市北区小深町3番地」より。現在の「北区芝田1-1-3」ではない。

【053】阪急三番街のテーマソング「愛の阪急三番街」は、作詞：岩谷時子、作曲：内藤法美、歌：鳳蘭と大原ますみ。1971年にシングル発売。

【054】その後、1990年に「川の流れる街で」(島田歌穂)が発売され、現在も使用されている。この曲は島田歌穂のベストアルバムにも収録されている。

【055】阪急三番街のイメージアートである「蝶・花・果実」は、線描の天才画家といわれたフランスのベルナル・デュッフェの作品。ロゴも、彼の直筆サインと固有マークを合わせてつくられている。ベルナル・デュッフェは、親戚家として知られていた。

【056】阪急三番街の南館地下2階には、せんとかんの作者である現代仏師・彫刻家の藪内佐土司が製作したブロンズ製の犬の連作がある。

【057】阪急三番街は国土交通省の分類では地下街ではない。

【058】阪急三番街地下2階、人工の川はトレビの泉をイメージしてつくられた。

【059】阪急三番街北館地下1階キッズトワレはすべて子どもサイズ、ベビーベッドや授乳室など設備も充実、南館地下1階バウガールームは更衣室、休憩用ソファまで至れり尽くせりの設備が好評。

【060】阪急三番街北館地下2階の水の芸術アクアマジックはアメリカデザインワールドでおなじみのウエット社製。

【061】「mikke」は「見つけ」に由来。

【062】地下街は自転車通行禁止。

【063】地下街は、道交法上では公道に分類されている。

【064】地下街の防水柵は、毎日、人力で開閉されている。ご苦労さまです。

【065】地下街のあちこちにある周辺地図は、見やすさ重視。北が上とはかぎらない。

【066】ドーチカ、ホワイトいうめだには住居表示が掲げられている。ホワイトいうめだは「梅田地下街」、ドーチカは「堂島地下街」。

【067】大阪駅前第一ビルは、じつは、地下6階まである。

【068】西梅田駅からJR大阪駅に行っても、JR大阪駅西口はもうない。今は桜橋口という。

【069】うめ地下の総店舗数は約1100店舗。床面積は約12万平方メートルで、甲子園球場3.1個分。

【070】地下鉄梅田駅、東梅田駅、西梅田駅は、30分以内であれば、改札を出て乗り換えOK。

【071】駅前ビルの地下を歩いているというの間にか隣のビルに入っている。

【072】地下1階にあるダイヤモンドと駅前ビルの地下2階がつながっている。ああややこしい!

まちの記憶

昭和から平成へ 梅田地下街の移ろい

祭屋梅の助 井上彰



阪急航空ビル



阪神ふるさと名産街にあった 老舗古書店の萬字屋書店



かつての阪神ふるさと名産街 (通称・アリバイ通り)



新宿西口のフォークゲリラ



映画『家族』のポスター

地下鉄御堂筋線改札前の広場(通路) タイル張りの円柱に張られた号外に見入る通行人



1970年の梅田地下街

山田洋次監督が映画『家族』を撮ったのは昭和45年のこと。西暦なら1970年で大阪万博が開催された年でした。かつては炭坑の島として栄えた長崎県西彼杵郡(現在の長崎市)伊王島町から、北海道中標津(なかしべつ)町の開拓村に移住を決めた家族の物語。倍賞千恵子、井川比佐志の夫婦に幼児と乳児、そして笠智衆の祖父という5人家族が繰り広げる戸惑いと悲しみのロードムービーです。

旅の2日目、家族は大阪で途中下車をする事になりました。大阪駅を出て見知らぬ土地にぼう然と立ち尽くす一行の目にまず飛び込んだのは、阪神百貨店の壁面いっぱい覆い尽くす万国旗……それは大阪万博を歓迎するディスプレイではあるのだけれど、お世辞にもセンスが良いとは言いがたい。巨大な飾りものでした。(私にとっても、あれは今も強烈な印象を残す事されない光景です。)

家族は食事をしようと地下街に潜るのですが、当時のウメダ地下センター(通称ウメ地下)は大阪人でも方向を見失うと言われたほどの巨大な迷路。あまりの人の多さに圧倒された家族は、大きな荷物を抱え、乳児を背負い、幼児の手を引いて、ただただ雑踏を右往左往するばかり。(ゲリラ的に日常の人ごみの中で撮影されたと思われるロケの映像は、わずかなショットではあるけれど当時の様子を伝えています。)

仕方なく地上に出た家族が目にしたものは、またもあのおびただしい数の万国旗。「あれえ、さっきと同じとこやがね……」と落胆する倍賞千恵子。

結局、家族は阪急百貨店2階の「風車」

でギターを弾きながら「フォークゲリラ」と称し、「We shall overcome (勝利を我らに)」や「友よ」などの反戦歌を歌いはじめました。

警官隊と衝突を繰り返しながらも最盛期には千人を超える人々が、梅田地下街に集まりました。「フォークゲリラ」といえば新宿西口広場が有名ですが、その活動の発祥は「ウメ地下」でした。

梅田地下街が「巨大な迷路」と言われる所以は、隣接する商業ビルの地階と直結してアメーバのように複雑に拡張を繰り返してきたから。商業ビルも時代の移ろいとともに次々再開発されて様相が変わり、迷路はさらに複雑になっていきました。

たとえば現在の「阪急メンズ大阪(阪急メンズ館)」の前身は「ナビオ阪急」でした。ナビオは、阪急航空ビルや北野劇場・梅田劇場・梅田スカラ座を解体した跡地に1980年(昭和55年)に建てられました。私にとって3つの映画館はそれぞれに想い出があるけれど、特別なつかしい思い出の出は、やはり阪急航空ビルでしょう。

ニューヨークのタイムズスクエアの建物みたいな航空ビルの外観には「色気」がありました。地下には映画館があって、小学生の私は祖母に連れられ、ちよくちよく出かけたものです。まだまだテレビが珍しい時代ですからニュース映画を観るのがおもしろく、同時に上映されるマキノ雅弘監督の『次郎長三国志』なんかを観るのも楽しみでした。ニュース映画で一世を風靡した竹脇昌作のナレーションや、『次郎長三国志』で流れる広沢虎造の名調子は、今でも耳に残っています。航空ビルの地下はやがてウメ地下に吸収され、そこにあった飲食店街の何軒かは地下街に移転し、今も営業を続けています。

白いまちへリフレッシュ

ウメダ地下センターは、1974年(昭和49年)にコマ通りの北端から阪急梅田駅

で大阪駅東口の横断歩道を見下ろしながら、やっとのことで昼食にありつきました。

大阪で最初に誕生した地下街はナンバ地下センターで、1957年(昭和32年)の開業でした。ウメ地下は東京オリピック前年の1963年(昭和38年)に開業しています。当初から「東洋一」「世界一」と注目されて、ニューヨークタイムズ紙の一面にも「日本の商店、地下に潜る」と題した記事が掲載されたほどでした。1970年には「泉の広場」を含む2期工事も完成し、迷路はさらに巨大化の一途をたどります。

当時のウメ地下の象徴的な光景といえば、地下鉄御堂筋線南改札前の広場(……というか通路)ではなかったでしょうか。阪急・阪神百貨店の地階ともつながったこの通路は1933年(昭和8年)の地下鉄開業当時に造られたもので、空気は淀み、照明も暗くて、ところどころ剥がれたタイル張りの円柱は薄汚れており、古びた平台に新聞や雑誌を並べただけの簡素な売店がいくつもあって、そこを縫うように、早朝から深夜まで大勢の通行人が足早に行き交っていました。

ウメ地下に反戦フォークが響く

1970年頃は特に若者たちが権力に反抗し、ヒートアップした時代でもありました。世界的にベトナム戦争反対の気運が高まった時代に、国内でも知識人たちが発起人となって「ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)」が結成され、それに共感した若者たち(私と同じ団塊の世代)が、1968年(昭和43年)にウメ地下の広場(通路)

とを結ぶ専門店街の「プチ・シャンゼリゼ」をオープンさせました。その5年前に開業した「阪急三番街」ともつながって地下のまちはさらに広域にひろがりました。大阪人は「初もん食い」と言われるけれど、「川の流れる街」としてセンセーショナルに登場した三番街の、開業当初のあの大混雑は強烈でした。今では地下のまちに川が流れていても誰も驚きません。ローマのトレビの泉にあやかって、川にコインが投げられていたのも、今は昔の出来事です。

大阪の表玄関にふさわしく、ウメダ地下センターが全面改装されて「ホワイティうめだ」に改称したのは1987年(昭和62年)でした。その後もディアモールやクラフフロントなどの大型商業施設と直結して地下街はますます拡大します。これから先も、大阪駅前の区画整理や阪神百貨店の全面改装などで「白いまち」はめまぐるしく姿かたちを変えていくことでしょう。

地下街が清潔に、美しくなるのは素敵なこと。しかし、かつては大阪の風物とまで言われた「阪神ふるさと名産街(通称アリバイ通り)」が消え、終戦直後から60年以上も営業を続けた老舗古書店の萬字屋書店も、赤提灯が灯る「ぶらり横町」もつぎつぎ消えて「大阪らしさ」がなくなってしまうのは残念な気がします。まちなにも色気が必要、だと思ふのですが……。

【井上彰】

昭和24年生まれ。キタを舞台にした伝説のフリーペーパー「あるっく」の編集・発行人。取材、執筆、編集、広告営業のみならず、果ては自転車に乗ってポストイングまでこなしたスーパーエディター。「あるっく」はやがて「天満人」に発展し、発売1ヶ月で初版3,000部を完売するも、平成7年に惜しまれつつ休刊。その後イタリア風食堂「祭屋梅の助」を5年間続け、平成27年3月にリセット。生き方を整理しながら『天満人』の続編発行を計画中。

【祭屋 梅の助】

大阪市北区天神橋 1-14-8
tel.090-3058-8947
夜のみ完全予約の社交場。詳しくはお問い合わせを。

キタのええもん

キタの手みやげ

鯖寿司は人と同じ心地よい温度を好みます



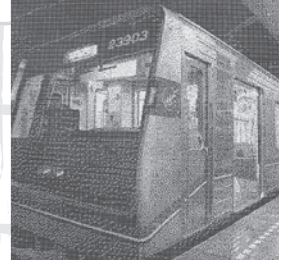
「天満鮮直」
【所在地】大阪市北区天神橋 1-15-14
【tel】06-6351-4191
【営業時間】10:00～19:00 (なくなり次第終了)
【定休日】火曜
【HP】http://sushinao.jp/

お店の引き戸を開けて声をかけると、奥から「はい」と笑顔で出てくる四代目女将さん。厨房では、四代目さんが黙々とお寿司をつくっています。大阪天満宮の門前地域は「天満の田舎」といわれる古いまち。そのなかでも特に都会と異なるのが、天満鮮直さん。建物は戦後の焼け野原に建てた昔ながらの町屋のまま、自宅兼お店ののれんをくぐれば、土間が続き厨房へ。奥へへっついさんとちゃぶ台窓の向こうには中庭、まるでタイムスリップしたような空間がひろがります。土間の厨房は、冬ともなると、底冷えがして屋内でも白い息が出るそうです。「この家なので、子どもたちはこの子よりも寒さに強く、元気でありがたいことです。冬場によそのお子さんは泊まってもらえないですけど…」と笑いながら話される仲のいいご夫婦です。

天満鮮直といえば鯖松前寿司が有名。鯖・米・昆布・薪、すべて地元中心に決まったところで仕入れられます。鯖はいいものが入らなければなりません。昆布を剥く職人が減って入手困難になってきていますが、そのなかでも妥協せずいいものを提供する姿勢は、半端なこだわりではありません。感謝の気持ちを忘れない四代目さんだから、業者さんも協力してくださるのでしょうね。そういう思いでつくった、さらさらと虹色に輝く鯖と、へっついさんに薪をくべて炊いたつやつやもちもちの寿司飯は、ここでしか味わえません。この他にも手間をかけた具材でつくる、お寿司の懐石ともいわれる箱寿司もぜひ、味わっていただきたい一品です。お寿司は生きている



西梅マンやら新20系やらあくまくんやら



「西梅田。二週目だ。なんか似てる...」「把瑠都...。NARUTO...。なんか似てる...」「ぶらりウオーク...。炙りポーク...。なんか似てる...。」「おしどり。おしぼり。なんか似てる...。」「師走...。市バス...。なんか似てる...。」「タルタルソース...。てるてる坊主...。なんか似てる...。」「西梅田駅地下通路のショーウィンドーに貼り出されている「月刊!?にしようNEWS」に掲載されている「駅員のつぶやきコーナー」には、こんなシニールなダジャレが、毎回掲載されている。真面目なお知らせがメインに掲載されているのだけれども、このシニールなダジャレのせいですべてが吹き飛んでしまい、メインの記事がまったく頭に入っていない。まったく、腹が立つてしょうがない。毎回毎回掲載されるので、シニールですらある。止める人はいなかったのだからか? 今では毎期待待してしまっ自分かいて、その中毒性は計り知れない。なんなんだこれは。」「師走...。西梅田駅のCS活動は、ちよっとおかしい。「西梅マン」と「西梅ちゃん」のみならず、ガンダムチックな「西梅ロボ」や「あくまくん」まで存在する。「あくまくん」て、なによ? それに、おのおののキャラクターは無駄にクオリティが高いのである。というわけで、このただならぬ事態を前にして、直接お話を聞き出したのだ。」「交通局内でCS推進所属の募集があり、それ



工学博士沖野忠雄君之像



目線の先には淀川大堰。淀川を望むように建てられた銅像の台座には「工学博士沖野忠雄君之像」とあります。その横に据えられた碑文を見ると、この像が1935年(昭和10年)に建てられたこと、第二次世界大戦で失われたこと、1979年(昭和54年)に再建されたことが記されています。銅像を再建? よほどの強い思いがなければ考えられないことです。再建してまで後世に残し伝えなければならなかった沖野氏とは、どんな人だったのでしょうか? そして、碑文にある、銅像を建てた「後輩」とは、どんな人たちなのでしょう? 国土交通省淀川河川事務所にて、お話をうかがいました。

沖野忠雄氏は、1854年(安政元年)、現在の兵庫県豊岡市に生まれ、1870年(明治3年)年に藩の貢進生(現在の特待生のようなもの)として大学南校(現在の東京大学)に入学し、在学中に政府による留学生としてフランスに派遣され土木工学を修めた俊才です。後年、内務省土木局技師となり、1911年(明治44年)には、内務省技監という、技術者のトップにまで登りつめます。沖野氏が活躍した明治初期、全国の大川は氾濫を繰り返していました。ただ、当時の日本における治水技術はまだ後進的で、日本政府が招聘する外国人技術者に指導を仰ぐ、揺籃期でした。そんななか、フランスに留学し治水技術を学んだ沖野氏は、外国人技術者に頼らない日本の治水技術を確立した人であり、全国の主要河川の治水事業のほとんどは、

彼の裁断を仰いだといえます。そんな沖野氏の輝かしい功績は、淀川治水に結実します。近代淀川の河川整備の礎をついた人であり、今日、私たちが見ている淀川の姿をつくった人でもあるのです。淀川の改修事業は、1885年(明治18年)に枚方市伊加賀で淀川の堤防が決壊、大水害が起こったことがきっかけではまりました。全国の河川事業のなかで、費用面でも工事規模の面でもこの淀川の事業を超えるものは、そうないのだそうです。

沖野氏は計画立案から現場の陣頭指揮までかわり、完成間近まで事業を主導しました。その影響は今も続いており、「現在の淀川水系の河川整備は沖野氏の指導を発展させたもので、その代表的な構造物は瀬田川洗堰と毛馬周辺に集約されています。なかでも、銅像建立の地に選ばれた毛馬は、「特に高度な技術を必要としていて、規模が大きかった」のだそうです。

銅像が建てられた1935年(昭和10年)は、淀川改修事業が完了した年であり、碑文にある「後輩」とは、建設省関係者、大阪府、大阪市、水防管理団体といった河川にかかわるさまざまな立場の人のごでした。また、再建された1979年(昭和54年)は、淀川改修100周年記念の年でした。沖野氏は、淀川に大きな改修があるたびに思い出される、淀川河川事務所にとって忘れてはいけない人「淀川だそうす。1921年(大正10年)に68歳で亡くなった沖野氏ですが、銅像は、彼が今も淀川河川事業の主人公であり続けていることを物語っています。(穂)

北区モノづくり最前線

第五回目 本庄西から技術力で精密な模型を製造 (株)西日本模型

今回は、建築コンベン向けの模型やマンションギャラリーにある模型など、精度と正確さを求められる模型をはじめ、研究開発関連やディスプレイなどの広告宣伝関連と、多岐にわたって、さまざまな建築物や立体物を「模型」で表現する会社である、本庄西三丁目(株)西日本模型代表取締役・田村寛人さんにお話をうかがいました。



1/150 スケールのマンション模型と田村さん。精密さと表現力で、見る人に感動を与える模型です。

昭和33年(1958年)に北区芝田二丁目目で創業。その後業務拡大とともに、大淀区(現北区)豊崎、そして平成3年(1991年)に現在の本庄西三丁目に移転してきました。英文社名が「Nishi Nihon Model Fabricators, Inc.」「ファブリケーター」とは直訳で「製作者」であり、モノづくりの最前線を走らんとする気概を感じさせる英文社名です。二次元の図面から三次元CADで立体のデータを作成し、加工機や3Dプリンターで立体物を作り出し、最後は「ファブリケーター」が精度を求められる仕上げをおこない、模型を完成させます。実際にマンションの模型を見せていただいたのですが、カタログやチラシ、映像などでは表現できない、模型ならではの訴求力を感じました。田村さんは、モノづくりは「イノベーション」だと感じているそうです。「イノベーションとは、ただ技術革新や新しいという意味ではなく、技術の熟練や、世の中と顧客の要望をつかみ、個人やチーム、会社

3・11 たくさんの人々の人生を変えた日

2011・3・11、東日本大震災。太平洋沖を震源とする観測史上最大の地震は、巨大な津波を発生させ、東北地方の沿岸部を中心に甚大な被害を及ぼし、多くの尊い命を奪いました。東京電力福島第一原子力発電所は全電源を喪失、原子炉の冷却ができなくなり、1号炉、2号炉、3号炉がメルトダウン。大量の放射性物質の漏洩を伴う過去最悪ともいえる原子力発電所事故に発展し、いまだに事態の収束のめどは立っていない状況です。

2012年からは「帰還困難区域」や「居住制限区域」が設定され、原発の周辺地域を中心に、住民の避難は長期化しています。また、国が定めるそのような地域にかぎらず、放射性物質による汚染は人々の生活の身近にあり、人々の生活を脅かしています。そのような状況下で、住めない地域の外側に暮らす人のなかにも、自らの判断により福島を離れ、避難を続けている人も少なくありません。

今回は、自分自身と愛する家族のために、福島で働く夫と離れ、大阪で母子避難生活を送りながら、国と東京電力を相手取り、関西地域に避難している被災者による「原発賠償関西訴訟」の原告団代表としても活動されている、森松明希子さんにお話をうかがいました。

金曜の朝、いつものように、旦那さんと幼稚園のプレスクールに通う3歳の長男を送り出したあと、ママ友たちと楽しい時間を過ごし、お昼頃に帰宅した森松さん。遅めの昼食をとり、育児日記をつけながら、生

後5ヶ月の赤ちゃんと一緒にゆったりとした時間を過ごしていたとき、14時46分が訪れます。

「ゴーツという音がして、ユラユラッと揺れだしました」。大学生の頃に阪神淡路大震災を経験されていたこともあり、最初は、「結構大きいけど、地震の経験があるから大丈夫」と悠長に構えていたそうです。しかし、すぐに収まるだろうと思っていた揺れは予想に反して一向に収まらず、赤ちゃんを抱っこして立っていられないほどに。「あまりにも長く続くので、地震ではなくテロかなにか別の事件じゃないかとも思いました」

「まるでポルターガイストのように鍋や電子レンジが部屋に飛び出し、本がたくさん入った本棚や食器が詰まった食器棚など、大人2、3人でも持ち上げられないくらい重いものが、壁から離れてピョンピョンと自分に向かってきたんです。あー、私はなにかの下敷きになって死ぬんだな。と、自分の命の危機を感じたのはこのときが初めてでした」と、地震の大きさとそのときの恐怖を語られます。自分の命の危機に直面し、「娘だけは助けなければ」と思い、誰か見つけて！という想いで、テーブルの下に娘を入れないので、揺れもテーブルの下に入れてもらっても楽しいアトラクションと感じ、キヤットキヤと喜んで笑っていたんですけどね」と、今となつては明るく笑い話のように語る森松さんですが、その当時の恐怖や、母として子どもを守りたいという強い想いが、言葉の端々から感じられます。

揺れの収まった家のなかは瓦礫の山。そのうえ、マンションの給水タンクが破裂し、水浸しになっていました。生後5ヶ月の娘

外から福島を見て、初めてわかった

震災から1ヶ月が経った頃、まちは復興に向けて動きだし、「がんばろう！東北」などの復興を鼓舞する言葉がまちなかに掲げられるようになります。そんななか、森松

たくさんの人への感謝を、
私の体験や直面した問題を
社会に伝えることで
お返ししていきたい。



聞き手・書き手／依藤智子 撮影／浅香保リス龍太

さんを濡らすわけにはいかない、余震が来たら逃げられなくなるかもしれないという気持ちで、首が座っていることを祈りながら娘さんをおんぶし、マンションの8階から非常階段を駆け下りたと言います。まさに母は強いです。旦那さんや幼稚園に行っていた息子さんなど、家族全員が無事に集まることができたのは、その日の夜のことでした。

色も匂いもなく、 肌で感じることもできない恐怖

その日から、森松さん家族は、旦那さんの勤務先だった病院に避難することになりました。病院には救済物資などが届かないため、最初は食べるものもなく本当にサバイバルだったとのこと。でも、蛇口をひねれば水が出る環境と、電気が確保されていたのはありがたかったそう。待合室のテレビで津波の甚大な被害や原発事故を知り、夜には旦那さんとテレビから流れる震災関連のニュースを食い入るように見ていたと言います。原発事故の深刻さを知り、放射性物質の飛散を示す円がどんどんひろがり、「原発から60キロ離れたここも時間の問題だな」と恐怖を感じながらも、「原発に近いところから順に、政府が避難バスを出してくるはず。人間は理性のある生き物なので、みんなが合理的に動けば自分も助かるということがわかっているの、落ち着こうという思いがありました」と、冷静に振る舞おう、振る舞わなくてはいけない、という当時の心境を話されます。

また、「被爆の恐ろしさは広島・長崎の話から知っていても、その対処の仕方がまったくわからないんです」とも。原発を数多く保有する国でありながら、事故があったときの対策や放射性物質がどんなものなのかということに、私たちはどれだけ無知なのかということをおい知らされます。

さん家族も家を新たに借り直し、3歳の息子さんも幼稚園へ。「まちは復興ムード一色で、放射性物質の影響も小さいから大丈夫」という情報だけがあり、福島でそのまま生活するという以外の選択はなかなかできない状態でした」と、当時を振り返られます。復興ムードのなか、不安や恐怖心を口にすることに風評被害を嫌う風潮と、放射性物質に関する本当の情報が少ないなか、安全だと思いたいという人々の心理によって、社会全体で見えない壁を築いていたの

で、福島を離れる家族は神経質扱いされ、「放射脳」と揶揄されることもあったと言います。「放射性物質は、色も匂いもなく、肌で感じることもできないもの。ベクレル、シーベルトという単位すら今回の事故以降に初めて知り、どんな量なのかリアリティを持って把握することができないんです」 「子どもが鼻血を出したという家族から、県外に出ていきました。うちの子は鼻血は出なかつたのですが、夜、子どもの寝顔を見ながら、鼻血出せ、と祈ってました」と、森松さん。子どもの変調があれば、この状況を抜け出せる理由になるという思いから、そんなお祈りをしていたのでしょ。

ゴールデンウィーク、子どもを家で閉じ込めておくのは無理だと思い、関西に帰省し、そのとき初めて外から福島を見ることになりました。「まともな人間の暮らしはこちらだどと気付くことができた。公園で自由に遊べる環境が子どもらしい生活で、それを心配しなくていいのが普通なのに、それに気付けなくなってしまうっていた」また、「関西のニュースを見て、福島の情報が、当の福島よりも関西のほうが充実していることに愕然としました」と、森松さん。福島では学校再開や仮設住宅などの復興に関わるニュースが多く、原発事故に関するニュースはあまり流されなかつたそうです。復興ムードの盛り上がり裏では、誰もが見えないものへの恐怖を感じながら、かざられた情報となりが正解かもわからないなか、日々、

命の水。飲まない方がいい。 でも飲むしかない。

そんな、わからない、見えない恐怖に直面しながら、避難生活が3週間を迎えた頃、東京の浄水場で微量の放射性物質が検出されたというニュースが伝えられ、同時に「200キロ離れた東京が汚染されているのだから、こっちは影響が出ていないわけがない」と直感します。案の定、次の日には県内の浄水場でも放射性物質が検出され、とても微量ですが、念のため、乳幼児のいるご家庭ではなるべく水道水を飲まないでください」と伝えるテレビキャスターの言葉に愕然としたという森松さん。「平時なら水もお茶もあるけど、今はそれが手に入らず、避難所では給水車の水をもらいに行く生活です。病院では、水道水が出ることもありがたく、命の水だと思って飲んでいました。それを飲むなど言われても、他に飲めるものはないんです。あんな酷なニュースはないです」。食料もままならない環境で、乳飲み子を抱えながら、水さえ飲んでいけば母乳で命をつなげられると、本当にありがた

く感じていた命の水が、じつは汚染されていた。そのことを知ったときのショックは計り知れません。「水道水は汚染されているから、飲まないほうがいいよね」と問いかけ、「そうだね」と旦那さん。「でも、飲むしかないよね」と問いかけ、「そうだね」と旦那さん。そのショックと事実をひとりでは受け止めきれず、その日の夜、旦那さんと交わしたそんなやりとりを、今でも鮮明に覚えているのだそうです。「短い会話ですが、私たちは、健康被害が出るかもしれないけど、飲むしかないという決断をし、どんなことがあっても夫婦で受け止めようという決意の会話でした」 「3歳の息子にも、毒だとわかっていても水を飲まずしかなかく、子どもにはなるべくいいものを与えてあげたいという親の心理からしても本当に辛く、母子避難を決断

それぞれが選択し、答えを出さざるを得ない状況がありました。関西に来て初めて福島

私の経験を伝えることで、 社会にお返ししたい

母子避難を決意し、生まれ育った関西に戻ってきた森松さんは、口はきついても人情味にあふれる関西人気質にあらためて触れることになりました。住民票を移していないために保育所に子どもを預けられないときには、一緒に区役所へかけ合ってくれた人がいました。「すごくたくさんの人のおかげでいただいた。5年経って、社会にお返ししたいという気持ちが出てきて、なにをお返しできるかを考えたときに、災害に直面し、避難するという体験そのものが社会的資源だと気付き、今回の体験や直面している問題を社会に活かしてもらうために、伝えることでお返ししていきたい」 「なにがよかったのか、なにが足りなかつたのか、制度としてなにが必要なのか。一番わかっている当事者こそが、そのような提言ができます。そのことを伝えていきたいと思い、活動しています。私たちが社会にお返しできることは、そういうことを伝えていくこと。自分の体験を通して、情報の大切さを痛感したからこそ、本当に必要なことを、ありのままの体験を伝えていきたいと語ります。ごく普通の主婦生活を送っていた森松さんは、震災からの体験を通じて、本当のことを知る、伝えることの大切さを痛感したと言います。今回話していただいた「命の水の話」も、森松さんにお話を聞くまでは想像もできないことでした。しかし、福島では、5年経った今でも命に関わる選択の日々が強いられている。その事実を知り、向き合い、ともに考えること。そんなあたりまえのことを私たちが継続していくことが大切だと思います。(終)